

資本蓄積および恐慌にかんするリカードの

理論とセーの市場法則

松 田 弘 三

一

古典経済学は、いまなお封建社会の残骸と闘いつつ、ただひたすら、経済的諸関係から封建的汚点をはらいおとし、生産諸力を増大させ、工業と商業とにあらたな一飛躍をあたえることに努力しているところの、ブルジョアジーを代表する科学である。それは、資本主義社会を生みだすにあつての、ブルジョアジーのものととも強力なイデオロギー的武器であり、また事実そのようなものとして十分な効力を發揮したのである。とはいつても、アダム・スミスとリカードとは、あ

さらに歴史的段階を異にしている。いうまでもなく、『国富論』と『経済学および課税の原理』とをへだてる四〇余年間は、まさに、資本主義社会を確立させた産業革命の嵐のような進行の時期だつたからである。だから、スミスではまだ、まさにきたらんとする確実な勝利が代表されていたとすれば、リカードは、すでにほとんどかちとられようとしていた勝利を代表していたといえよう。この彼らの立つていた現実の地盤が、彼らの経済学の性格の差別性と、しかも究極における同一性とを、制約しているようにおもわれる。

いうまでもなく、スミス経済学は「諸国民の富の性質と原因の研究」であり、したがって生産の経済学である。これにたいして、リカード経済学は分配の経済学であるといわれている。（たとえば、ジイド・リスト『経済学説史』、邦訳、一九七―八ページ。）たしかに、リカードは、周知のように、『経済学および課税の原理』（*Principles of Political Economy and Taxation*, 1817）

の序文において、「土地の生産物」は、「地代、利潤および労賃の名のもとに」、「土地の所有者」、「資本の所有者」および「労働者」の「三階級のあいだに分たれる。」「この分配を規制する法則を決定することが、経済学における主要問題である。」（*The Works and Correspondence of David Ricardo*, ed. by P. Sraffa, Vol. I, p. 5）とのべている。またマルサスあての手紙（一八二〇年一〇月九日づけ）にも、「あなたは、経済学は富の性質および原因の研究である、と考えておられますが、わたしは、それはむしろ勤労の生産物の形成に協力した

諸階級のあいだへの、その生産物の分配を決定するところの法則の研究とよばれるべきだとおもいます。」（*Works*, Vol. VIII, p. 278）と書いている。このことは、リカードにとつて、経済学の課題が、スミスにおけるとはちがつて意識されてきたことをしめすものである。もちろん、いかにして国民の富を増大させるかということはいぜんとして根本的な問題であつたが、それとともに、産業革命にもとづく生産力の飛躍的な発展と資本主義社会の確立とは、いまや豊富となつた富の労働者・資本家・地主の三大階級のあいだにおける分配の、なかんずくその利潤と地代とへの分割の、問題をあらたに日程にのぼせるにいたつたのである。そしてそれは、当面の実際政策が理論的解明をもとめてやまぬ問題でもあつた。リカードにとつて、分配問題が経済学の中心課題として意識されたのは、このような情勢のもとにあつては必然のことであつた。

しかしながら、経済学の対象は、なによりもまず

「物質的生産」、しかも「一定の社会的發展段階における生産」すなわち「近代ブルジョア的生産」であり、「分配関係と分配様式とはただ生産要因の裏面としてのみあらわれる。」すなわち、「分配の組織はまつたく生産の組織によつて規定されている。分配は、それ自体が生産の産物である。たんに対象の点からみて、生産の結果だけが分配されうるといふことはかりでなく、また形態の点からみて、生産に関与する一定の仕方が、分配に関与する形態を規定する。」(K. Marx, Zur Kritik der politischen Ökonomie, S. 215, 217, 229. 邦訳、マルクス||エンゲルス 選集補巻3、二五六、二五八、二七一ページ)のである。このことは、しかしリカード自身もまた知つていたところである。彼は、分配される生産物の「量については、なんらの法則もたてることができないが、率についてはかなり正しい法則をたてることができるだろう。」(Ricardo, *ibid.*)といひ、そして「われわれに地代、労賃および利潤の率を正しく判定

させるものは、各階級の取得する生産物の絶対量ではなくて、その生産物を獲得するのに必要な労働量である」(Principles, Ch. I, Works, Vol. I, p. 49)とのべている。すなわち、リカードの分配論は、結局労働によつて生産された価値が、その生産に関与した諸階級のあいだにどのような割合で分配されるかの研究であつたのであり、したがつて彼においては、分配は生産から分離して考えられることなく、むしろ分配を生産の一契機として理解しているのである。マルクスはいつてゐる。「近代的生産をその一定の社会的編制において把握することを任務としたリカード、すぐれて生産の経済学者であるリカードは……生産ではなくて分配こそが近代経済学の本来のテーマである。と宣言する。」「というのは、彼は本能的に、分配形態を、あたえられた社会で生産要因が固定するもつとも決定的な表現として、把握したからである。」だからこそ、リカードは、「生産を永遠の真理として展開し、歴史を分配の領域に

封じこめる」ところのその「愚劣な」(Marx, a. a. O. S. 230, 231. 邦訳前掲書、二七二、二七三ページ)にもかかわらず、資本制生産の分析を任務とする古典経済学の最高の代表者だったのである。

しかも、リカードにおける分配は、右にみたように生産の一契機としての分配、すなわち「生産過程そのものの内部にふくまれていて、生産の仕組を規定する分配」の意味をもつものであつて、生産物の分配は「こういう分配の結果にすぎない」のである。（もつとも、マルクスによれば、この種の分配とは、「一、生産用具の分配であり、二、おなじ関係のよりすすんだ規定なのだが、種々の生産への社会成員の分配（一定の生産関係への諸個人の包摂）である」(Marx, aa. O.S. 231. 訳二七二—二七三ページ)が、リカードはもとよりそれを自覚していない。)それゆえ、リカードの理論体系は、たんなる生産の理論でもなければ、たんなる分配の理論でもなく、一つの再生産理論であつたといえ

よう。(松尾博「リカード理論の性格」、『彦根論叢』第二七号⁽¹⁾参照)

(1) 松尾氏は、リカード理論を一つの再生産理論として検討しなほす必要を主張されているが、同感である。もつとも右の論文は、この目的のためにリカード理論の形成過程をあとづけた準備的労作であつて、その課題はまだ全的には果されていないようである。

すなわち、リカード経済学は、彼自身には分配理論として意識されていたけれども、その理論的性格からいえば、資本蓄積論、すなわち資本主義社会における拡大再生産の理論だつたのである。もちろん、スミス経済学もまた一つの再生産理論であり、資本蓄積論であつた。『国富論』の第一・二編が、そのうちに交換論および分配論を包摂した生産論であつたからである。しながら、本来の資本蓄積の問題とその前提たる市場形成の問題とを混同し、農・工の部門分割と農業労働の生産性にかんするフィジオクラートの觀念の残滓をもつていたスミスにたいして、市場の全般的成立と平

均利潤率の成立を基礎として、三大階級の明確な分化にもとづいて、蓄積の諸契機を確定したりカードは、より高い歴史的ならびに理論的段階を表現するものであり、リカードこそ古典派的蓄積論の完成者だつたのである。(吉沢芳樹「古典経済学の完成」、出口勇蔵編『経済学史』一七三—一七四ページ参照)かくして、彼の分配理論も、実は蓄積元本^{フアンデ}を確定し、資本蓄積にともなう労賃・利潤・地代の変動関係をあきらかにする意味をもつものであつた。

この分配問題にたいするリカードの根本的立場は、地代は、マルサスのいうように「純利得」または「富のあらたな創造」ではなくて、「穀物および諸財貨の価値の一部分」を、「そのもとの所有者」たる資本家から「地主へ地主へ移す」ものにすぎない。(Principles, Ch. XXXII; Works, Vol. I, p. 398, 400)これに反して利潤は、その一部が資本に再転化されて拡大再生産を可能にするものであるから、蓄積元本であり、とりわけ

「労働維持のための元本」であるというにあつた。かくして彼は、資本家を「生産的階級」、地主を「不生産的階級」と規定している。(Ch. XIX; *ibid.*, p. 270)このリカードの立場が、新しい現実^{リアリティー}に則してスマスのそれをいつそう徹底させた、産業ブルジョアジーの立場であり、産業資本の本格的確立と資本蓄積の順当な発展のために、地主的障^{バリア}碍を除去しようとするものであつたことはいうまでもないであらう。

しかるに、リカードが経済学の中心問題と考へた分配法則そのものである、「地代、利潤および労賃の自然のなりゆき」(Ch. I; *ibid.*, p. 5)にしたがえば、社会の発展——すなわち資本の蓄積——にともなつて、地代は次第に騰貴し、利潤は次第に下落する。なぜなら、リカードによれば、地代は、「増加した人口にたいする食物供給の困難の結果」(Ch. II; *ibid.*, p. 77)といふかえれば耕境がより劣等な土地へとひろがつてゆかねばならぬために、騰貴するが、これに反して利潤は、

「社会と富との進歩につれて、必要な食物の附加的分量はますます多くの労働の犠牲によつてえられるから」、「必需品の価格」が騰貴し、したがつて「労賃」が騰貴するために、「下落」せねばならぬのである。かくして「利潤の自然的傾向は低下すること」(Ch. VI; *ibid.*, p. 120) であり、ついにはきわめて低い利潤率がすべての蓄積を停止させるにいたるであろう。リカードにとつては、この利潤率の低下はもつとも憂うべき事態であつた。資本の蓄積がなければ、富の増加もなく、労働需要の増加もない。利潤率の低下は蓄積を妨げるものであるから、資本家階級のみならず国民全体の不利益である。「自然のなりゆき」にしてすでにこうである。このうえ、地主階級の利益のために穀物価格を人為的につり上げて、利潤を低落させ蓄積を阻害する、「穀物条例」のような政策はすみやかに廃止されねばならぬ、とリカードは主張したのである。

ここでリカードが、必需品の価格騰貴にともなつて

貨幣賃銀は騰貴するが、実質賃銀は下落するであろうといつてゐること (Ch. V; *ibid.*, p. 101)、およびさきに見たように利潤を「労働維持のための元本」とみなしていることは、彼が、地主階級にたいする資本家階級と労働者階級との利害の共通性を主張するものである。そしてそれは当面の段階においては、必ずしも誤りとはいへなかつた。リカードは、土地利益に対立する労働者と資本家とをふくむ広義の働く生産者階級の立場にたつていたのである。ここに彼の経済学の科学性と進歩性との根柢があつた。

その反面、リカードは「利潤は、労賃が低いか高いかに反比例して、高く、あるいは低くであろう。」(Ch. VI; *ibid.*, p. 110) とつうこと、すなわち利潤と労賃との相反関係を、いたるところで確言し、これをほとんど自明のことがらとみなしている。しかも彼が、利潤の本質・源泉をすこしも究明しようとしていないのは、あきらかに彼のブルジョア的本能にもとづくもの

であつた。しかしながら、彼は利潤と労賃との敵対的関係を闡明し、資本主義の矛盾をおそれるところなく暴露しているのであつて、俗流的に労働にたいして資本を弁護するようなことはしていない。この科学的誠実さはどこからきたのであろうか。それはたんに若き産業ブルジョアジーの自信と大胆との所産ではなかつた。リカードのたつていたのは、いわば「労働者階級を同盟者として資本家階級の立場」(白杉庄一郎『経済学史概説』上巻、一九三ページ)であつた、といつてよいであらう。当時この階級は、土地利益にたいする關係において、なお広義の働く生産者階級といつてよいような側面をもつていたのである。

そのことはなによりも、リカード経済学がその基礎理論として、スミスの労働価値説をうけつぎ、これを純化發展させていることにあらわれている。リカードは、ブルジョアの経済体制の内的連関の探究と外的連関の敘述とのあいだをたえず動搖していたアダム・ス

ミスを超尅して、ブルジョア体制の生理学の——その内的連関の理解の——基礎たる、労働時間による価値の決定から出発し、ついで他の経済上の關係や範疇がこの価値の決定と矛盾するかどうか、またそれらがこれをどの程度変容するか、を研究している (K. Marx, Theorien über den Mehrwert, Bd. II. 1. S. 2-4. 長洲一三

訳、国民文庫版、第二冊、一〇一—一三ページ)のである。かくして、価値を働く生産者の立場から把握するところの労働価値説は、リカードにいたつてはじめて、経済学体系の基礎・出発点として、真に確立されたのである。これこそ、経済学にたいするリカードの最大の貢献であつた。

ところで、資本の蓄積過程の分析のためには、理論的に、資本の再生産過程、とりわけ単純再生産過程の解明が、その基礎とならねばならぬ。そしてこの点については、古典派理論は、全面的に、スミスの分析に依拠しているのである。再生産過程分析のための「基

「基礎範疇」は、いうまでもなく、社会的生産の生産手段・消費資料の二部門への分割と、生産物価値の不変資本・可変資本・剰余価値の三部分への区分（ $c+v+m$ ）である。（マルクス『資本論』第二巻第三編第二〇章第二節）しかるにスミスの再生産論は、かつてわたしも考察したことがあるように（拙稿「アダム・スミスの再生産論」、『経済論叢』第六六巻第一・二・三号、昭和五年九月所載）、生産部門については、基本的に農業と工業とへの分割を基礎とし、生産物価値については、いわゆる「アダム・スミスのドグマ」（『資本論』第二巻第三編第十九章第二節）——商品価値の労賃・利潤・地代、すなわち可変資本と剰余価値との区分、不変資本の無視（ $v+m$ ）——におちいつていたのである。もつともこのような謬見にもとづいては、社会的再生産過程の把握はとうてい不可能であるから、スミスも総収入と純収入とを区別することによつて、みずからの理論に背いて結局不変資本部分のみとめ、またこれに関連して、事実上

生産手段を生産する労働と消費資料を生産する労働とのあいだの区別に到達しているのであるが。この問題にかんして、リカードは、他の古典派経済学者たち（セー、シスモンディ、J・S・ミルなど）と同様に、「スミスのドグマ」を完全に踏襲している。すなわちリカードはつぎのようにいつている。「あらゆる国の土地および労働の全生産物は三部分に分たれ、そのうち一部分は労賃に、他の部分は利潤に、そしてこのりの部分は地代にあてられる。」（Principles, Ch. XXVI; Works, Vol. I, p. 347）云。

さらにこのドグマから、必然的に、蓄積をたんに剰余価値の追加可変資本への転化として、すなわち労働力の購入にのみあてられるものとして把握し、その追加不変資本すなわち生産手段への転形を無視するところの、スミスの蓄積にかんする誤つた見解がでてくる。（『資本論』第一巻第七編第二章第二節）これもまた、リカードがそのままうけついでいるところである。すな

わち彼はいつている。「一国の生産物はすべて消費されるが、しかしそれを消費する者が他の価値を再生産する人々であるか、または再生産しない人々であるかは、想像しうる最大の相違を生ずるところを、理解しなければならぬ。収入が貯蓄されて資本に附加されるといふばあいには、われわれの意味するところは収入のうち資本に附加されるといわれる部分が、生産的労働者によつてではなく生産的労働者によつて消費されるということである。資本は非消費によつて増加されると想像するよりもより大きな誤謬はない。」(Ch. VII; *ibid.*, p. 151)と。リカードにおいても、蓄積

は剰余価値の追加可変資本すなわち労働力のみへの転化であつて、その追加不変資本、いかえれば固定資本および流動不変資本——原料その他に投せられた資本。これは彼が流動資本を可変資本と同視している結果、資本の分類においてすでに消え失せているのであるが——への転形は、まったく見落されているのである

。だからこそリカードにとつては、さきにみた様に、利潤はそのよま「労働維持のための元本」(Ch. XIX; *ibid.*, p. 270)だつたわけである。

生産部門の問題については、リカードには、スミスのような素材的な農業と工業との分割は存在しない。農業と工業(あるいは原始生産と製造業)とは、彼にとつては、もはや質的に異つた生産部門ではない。このことは、農業労働がもつとも生産的であるというスミスのフィジオクラートの觀念の、リカードによる克服(Ch. II; *ibid.*, p. 76)に対応するものである。そして彼は、前述のように、労働者・資本家・地主の三大階級への分化にもとづく分配理論を基礎として、蓄積の問題にたちむかつていたのである。しかし彼には、スミスにみられたような、生産手段・消費資料の二部門への分割の觀念の萌芽はみとめられない。そしてリカードは、再生産論の問題を、ケネーやスミスのように、社会的資本の再生産と流通の過程の分析として

解明して⁽³⁾いない。いいかえれば、リカードは、社会的生産物の実現（＝価値補填・素材補填）の問題をまったく意識していない。このことは、なんといつても、リカードの再生産＝蓄積論の一大欠陥であるといわねばならない。

- (2) リカードはそこでスミスに反対して、「自然の労働が報酬をうけるのは、自然が多くをなすからではなくて、そのなすところが少いからである。自然がその贈物について吝嗇になるにつれて、それはその仕事にたいしてより大きな価格を要求する。それが寛大に恵をあたえるばあいにはそれはつねに無償で働く。」⁽⁴⁾といひ、また「製造業においては、自然は人間のためににことをもたさないであるうか。」⁽⁵⁾と云つて、風力・水力・熱・蒸気力などの例をあげている。

(3) ケネーの『経済表』が、社会的総資本の再生産と流通の分析であつたことはいうまでもない。「それ『経済表』は、資本の生産過程全体を再生産過程としてしめし、流通をまつたこの再生産過程の形態として、貨幣の流通をたんに資本の一楔機としてしめそうとする試みであつた。」(K. Marx, Theorien über den

Mehrwert, Bd. I, S. 91. 訳、国民文庫版、第一冊、八六ページ) スミスの『国富論』第二編「貯財 (Stock) の性質、蓄積および用途について」もまた、資本論であると同時に再生産論であり、したがつて社会的資本の再生産過程の分析である。しかもその欠陥にもかかわらず、再生産論においても、スミスはケネーより本質的に前進していた。「アダム・スミスこそ、生産物は生産物と交換されるという真理 (重農学派もこれを知つていた) を認めることにとどまらないで、社会的資本と生産物との各種の構成部分がそれらの価値上いかに補填されるか (実現されるか) の問題を提起したのである。」(Lenin, Nochmals zur Frage der Theorie der Realisierung, Sämtliche Werke, Bd. II, S. 460) しかるにリカードは、ケネーおよびスミスのこの再生産論——狭義のそれ。すなわち実現論——をうけつていないのである。「リカードはこれらの問題——すなわち「所得と社会的資本との関係の問題および生産物の実現の問題」——を提起することさえしなかつた。」(レーニン、『経済学的 ロマン主義の特徴づけによつて』、全集第二卷一三六ページ、訳一三七ページ)

以上に略述したリカードの資本蓄積論からは、蓄積を制限するものは蓄積される利潤（実は剰余価値）量のみであり、それゆえに利潤率の低下をひきおこすところの、労賃の騰貴、したがってまた穀物価格の騰貴のみであるという、結論がみちびきだされる。いいかえればリカードは、蓄積、一般的にいえば生産が、みづから市場をつくりだすと考えているのである。そのかぎり彼は、市場が、すなわち労働者階級あるいは地主階級の過少消費が、生産したがってまた蓄積を制限すると主張するところの、シスモンディあるいはマルサスの見解に対立して、販売と購買との一致、供給と需要との均衡という、セーないしジェームズ・ミルの「販路説」とおなじ陣営にぞくするもののようにみえる。かくしてここに、リカード理論とセーらの販路説との関係が問題にされることとなる。この問題はとくに、いわゆる「セー法則」〔雇傭・利子および貨幣の一般理論〕、邦訳、三三三ページ）を「リカード経済学にとつ

て基本的なもの」(同上、四〇ページ)とみなし、これを彼によつて定義された——リカードおよびジェームズ・ミルならびにその先行者たちばかりでなく、J・S・ミル、マーシャル、エッジワースおよびビゲー教授までをふくむところの——「古典派経済学者」(同上三四ページ)の共通の標識とさえなしたところ⁽⁴⁾、インズによつて提起された。そしてこれに解答をあたえたものは、なかんずくミーク (Ronald L. Meek, The Decline of Ricardian Economics in England. "Economica", Feb. 1950)⁽⁴⁾であつたとおもわれる。われわれは以下においてまず、彼とおなじように、リカード経済学の成立過程に則して、この問題を考察してゆきたい。

(4) なおわが国においては、とくに、中野正(均衡論的歪曲の発生)、『経済評論』一九四八年二月および六月号)豊倉三子雄(「リカードウの部分的過剰説」、『経済学論究』第七卷第二号、一九五三年七月)、および平瀬巳之吉(『経済学の古典と近代』第四章二F、一九五四年)の諸氏が、この問題について見解をのべら

れている。ただし、前二氏はリカードとセーとの恐慌にかんする見解の差異を、平瀬氏はその連関を主張されており、また中野・豊倉両氏の見解のあいだにも若干の相違がある。それらについては、後にふれる。なお、時永淑氏の「リカード経済学の生成とその労働価値論との関連」(『経済志林』第三卷第二号、一九五五年四月)および「リカード『原理』の生成とその労働価値論との関連」(同誌同卷第三号、同年七月)は、この問題を主題とするものではないが、リカード経済学の生成を丹念にあとづけつつこの問題にも光を投げられている。

リカードは、一八〇九年八月の処女作『金の価格』(The Price of Gold, The Morning Chronicle, Aug. 29,

1809) によつて経済学者として登場して以来、翌一八一〇年はじめの『地金の高い価格』(The High Price of Bullion, A Proof of the Depreciation of Bank Notes) お

よび同年一二月の『ボザンケ氏への答弁』(Reply to Mr. Bosanquet's Practical Observations on the Reply of the Bullion Committee) のジュリアン・フットにやむじ、当時の金の価格騰貴と為替相場の下落とが、イングラ

ンド銀行の兌換停止にもとづく銀行券の過剰発行によるものであるとの立場から、「地金論争」における一方の理論的指導者としてもつばら通貨問題を論じ、一八一年以来マルサスともこの問題について論争をつづけてきた。しかるに彼は一八一三年ごろには、さらに一般的な経済問題についての見解をもつに至つた。すなわち、この年八月一七日づけのマルサスあての手紙のなかに、食糧の生産における新しい便宜だけが、資本の増加にともなう利潤率の低下を防ぎうるという、自己の理論をのべている(Works, Vol. VI, p. 95)が、これは、利潤率は穀物価格したがつて労賃の騰貴の結果としてのみ低下するという、リカードの利潤理論——利潤率変動論——の起源をしめすものである⁽⁹⁾。

- (5) 一八一三年二月より八月にいたるマルサスあての五つ
の手紙は、従来のボナー編の書簡集(Letters of D.
Ricardo to T. R. Malus, ed. by J. Bonar, 1889)
では、その日附を誤つて一八一〇年とされていたため
に、この利潤理論の起源が、不明瞭にされていたが、

スラッファ編の『リカード全集』(The Works and Correspondence of D. Ricardo, ed. by P. Staffa Vol. VI, 1952) によつてその誤を正されたものである。

さらに彼は、一八一四年三月以降、穀物輸入制限の資本の利潤におよぼす影響について、マルサスと論争することとなつたが、その立場はさきほどの理論の發展として、「経済学の諸命題のうちで、ある輸入国における穀物の輸入にたいする諸制限は利潤を低くするものだという命題ほど、わたしが確信しているものはありません。」(Letter to Malthus, 26 June 1814; *ibid.*, p.109) ということであつた。この問題は、一八一三年の豊作と一四年三月のナポレオン戦争の終結にとともなう穀物価格の暴落によつて、一般の関心をよびおこしたものであるが、この「穀物条例論争」における、産業資本家階級と地主階級との最高の理論的代表者が、それぞれリカードとマルサスとであつたことは、いうまでもないであろう。そして当面の段階においては、一八一

五年三月の「新穀物条例」の制定によつて、凱歌は地主階級にあがることになるのである。

ところでリカードはこのころすでに、彼が「ミル氏の原理」とよんだもの、すなわちジェームズ・ミルが『商業擁護論』(James Mill, Commerce defended, an answer to the agreements by which Mr. Spence, etc. 1807) のなかで提出したセー法則の変種に、注意をはらつていた。彼はマルサスにたいしていつている。「もしあなたが、資本が増加するにつれて、人々は消費にたいしても蓄積にたいしてもひとしく無関心になるものだとお考えになるのであれば、あなたが、一国民についていえば供給はけつして需要を超過しうるものではないというミル氏の思想に、反対なきるのは正当です。」(Letter to Malthus, 16 Sept. 1814; Works, Vol. VI, pp.133-134) と。しかし実際には、人間の欲望は無限であるから、需要が資本と足並をそろえて増大しえないという理由はないと、彼は論じた。「われわれはすべて、

われわれの享楽や力を増そうと望んでいます。消費はわれわれの享楽を増し、蓄積は力を増し、ともに需要を増大させるものです。」(Ibid., pp. 134-135)

リカードは、利潤率を決定する原因について——それを生産物の供給の有効需要にたいする割合にもとめるマルサスに反対して——書いています。「あなたは、資本を使用する諸方法とくらべて資本が乏しいときは、それがどういう原因からきたものであつても、利潤は高くなるだろうといつておられますが、それはわたしも賛成します。……しかし資本を使用する諸方法とくらべて資本を乏しくさせるところの原因とはいかなるものであるかをみとどけること、それからこれらみとどけられたとき、それらの原因がどの程度まで一時的ないし永続的と考えられるかをみとどけることが、きわめて重要でです。このような研究においてこそ、わたしは、土地の耕作の状態こそ、ほとんど唯一の大きい永続的な原因であると信ずるようになったので

す。」そしてこの「土地からの生産の状態——土地に生産させるに必要な手段とくらべての——は、すべての營業にたいして作用するもので、これだけがその効果からいつて永続的なものです。」(Ibid. p. 135)と。リカードにおいては、なぜこのように、「農業利潤が他のすべての産業の利潤を決定する。」(Letter to Trower, 8 March 1814; *ibid.* p. 103)と主張されたのであろうか。それは、「利潤率と利子率とは、生産にとつて必要な消費にたいする、この生産の割合にかかつているものでなければなりません——この割合はまた、本質上食糧品の低廉性にかかつており、この食糧品の低廉性こそ、われわれがそのあいだにいかなる中間項を容認するにせよ、結局労働賃銀の一大調節者たるものである。」(Letter to Malthus, 26 June 1814; *ibid.*, p. 108)という彼の觀念にもとづくものである。すなわち、「生産にとつて必要な消費」を、労働者による生活資料の消費と考え、この生活資料(の価値)が、労賃を規定するこ

とによつて、利潤率を決定するとなしているのであるが、そこにリカードによる剰余価値の把握の根本的欠陥がひそんでゐる。いうまでもなく、剰余価値の大きさは、労賃——実は労働力の価値——によつて規制されるばかりではなく、また労働日の大きさによつても規制されるからである。⁽⁶⁾しかるに彼は、「労働日の大きさは一定ということから出発する」結果、「相対的剰余価値」(Marx, Theoret, II. I. S. 134 訳一六四ページ)だけを問題とし、必要労働と剰余労働との割合のみ注目して、剰余価値の源泉をあきらかにしえないこととなるのである。そしてそこから利潤と労賃とはつねに反対の方向に運動するという、彼の誤つた法則がみちびきだされることになるのである。

(6) 事実リカードとマルサスとが問題とした、ナポレオン戦争中の一七九三年から一八一三年にいたる時期は、穀物価格と名目賃金とが騰貴したにもかかわらず、利潤率が増大したが、それはマルクスの指摘しているように、めちやくちやな発展局面にあつた主要産業の日

資本蓄積および恐慌にかんするリカードの理論とセーの市場法則(松田)

々の労働時間数が非常に増大したために、剰余価値率の低下がおさえられた結果利潤率の低下もおさえられたからである。(Marx, Theorien, II. I. S. 129. 訳一五九ページ)

それはともかく、この年の末には、リカードは自己の理論を、資本蓄積との関連において、つぎのように定式化するにいたつた。「資本の蓄積は利潤を引下げの傾向をもつています。なぜでしょうか。蓄積は、農業における改良をとまなわなにかぎり——ともなうばあいには、それは利潤を減退させる傾向はありません——、いつも食糧を獲得するうえで困難の増大をもたらすからです。この困難の増大がなければ、利潤はけつして低下しないでしよう。なぜなら、製造業における有利な生産にとつては、労賃の騰貴以外に制限はないのですから。かりに、資本の蓄積とともに、われわれがいつも一片の新しい肥沃な土地をわれわれの島につけ加えることができるとすれば、利潤はけつして低

下（2）じな（2）じよう。」（Letter to Malthus, 18 Dec. 1814, *Ibid.*, p.162）つまり、土地の收穫遞減（2）にもとづく穀物価格の騰貴が、労賃の騰貴をひきおこし、そのため利潤が下落するという主張である。彼は「粗生生産物の価格の騰貴が利潤におよぼす影響は、対角線的に対立的でありうる。」（Letter to Malthus, 23 Oct. 1814; *Ibid.*, p.146）と強調している。しかし「一般的にこゝでは」彼のいうように、「蓄積にともなうところの利潤の低下」というものは、生産物の価格と比較した、生産の価格の騰貴の結果である。（*Ibid.*, p.148-9）のだから、問題は、「生産の価格」すなわち労賃ないし穀物価格の騰貴を強調することだけでも解決されないのであつて、生産物の価格の変動をあきらかにしなければならず、ひいてはこの価格そのものがいかにして決定されるかを説明しなければならないことになる。

- (7) ミークはこの手紙について、つぎのようにいつている。
「ここに『原理』の体系の骨格がはつきりとしめされた。

肉と精神とはいぜんとして欠けていたが、リカードの資本の利潤にかんする論文の出版のときに、両者はともに提供された。その肉は地代の新理論からなつていた。——この新理論にむかつて、リカードは一八一四年のあとの数カ月間はつきりと手きぐりですすんでいたのである。その精神——全体系の中心原理——は労働価値説であつた。——この理論にリカードは、ますます増大する重要性を附与することになつた。」（R.L. Meek, *Decline of Ricardian Economics*, *Economica*, Feb. 1950, p.47）と。まことに一八一五年の『低穀物価格が資本の利潤におよぼす影響にかんする一論』において、差額地代法則が定式化されたことはあきらかであるが、価値論については、『一論』ではまだ生産費説であつて、労働価値説の構想は同年末ごろからであること、後述のごとくである。

- (8) 「資本の蓄積は」、原則として、「食糧を獲得するうえでの困難の増大をともなう」というリカードの見解が「収獲遞減の法則」を前提とするものであることは、いうまでもない。この法則は、地代法則と同様に、アランダスンによつてはじめて定式化され、ウエスト、マンサスらをへてリカードにつたえられたものであるが、リカード自身は早くからこれを自明のものともなっている。すなわち、一八一〇年ないし一八一一年に書か

れた『ベントムの「価格論」への評註』(Notes of Bentham's Sur les Prix, 1810-11)のなかに「明瞭に、「土地の生産力は、それに使用される労働と資本とに比例して減少する。」(Works, Vol. III, p. 287)とのべられている。しかしこの「収獲遞減の法則」なるものは、農業の技術的進歩を無視するものであるから、正しくない。「収獲遞減の法則は、技術が進歩し、生産方法が変化しつつあるばあいには、まづたくあてはまらない。それはたんに技術が不変のままであるばあいに、きわめて相対的に条件づきであてはまるにすぎない。」(フーニン『農業問題と「マルクス批判者」』全集第五巻、訳一〇二ページ)

なお、このおなじ一八一四年二月十八日の手紙でリカードははじめて、「需要は生産によつて規定される」という「セー氏の学説」⁽⁹⁾に直接言及している。(Ibid. pp. 163-164)

- (9) セー (Jean Baptist Say, 1767-1832) の「市場法則」あるは「販路説」(Theorie des débouchés; loi des débouchés) は、彼の名著『経済学概論』(Traité d'économie politique, 1803)のべられている。それは一言でいえば、「生産物は生産物をもつてのみ買われ

資本蓄積および恐慌にかんするリカードの理論とセーの市場法則 (松田)

る。(P. 306)と云うことである。すなわち、「生産物に販路をあたえざるものは他の生産物」(p. 299)であり、「貨幣は交換の媒介手段」(Ibid.)にすぎず、したがって「販路の停滞とは供給が必要をこえることにはちがいないが、しかしそれは他の生産物が過少だからで、貨幣が不足だからではない。」(p. 303)というのである。あるいは、彼がマルサスを反批判した『マルサス氏への手紙、経済学の諸主題、とくに商業の一般的停滞の原因について』(Lettres à M. Malthus sur différents subject d'économie politique, notamment sur les causes de la stagnation générale du commerce, 1820)のことばによれば、「われわれはだれでも各自の生産物をもつてしか他人の生産物を買うことができないのであるから、そしてわれわれの買いうる価値は、われわれの生産しうる価値と等しいのであるから、人々はより多く生産すればするほどますます多く買うであろう。」したがって、「もしもある商品が売れないならば、それは他の商品が生産されないからである、また生産物の販路をひらくものは、これひとり生産のみである。」(中野正訳『セー、恐慌に関する書簡』世界古典文庫、一五〇ページ)というのである。そのリカードの理論との相異についてはのちにのべるが、ここではさしあたり、セーの経済学が、「物の価値は

物の効用、すなわちわれわれの欲望を満足させる物の性能にとづく」（前掲書二五—二六ページ）とする、効用価値説を基礎とするものであつたことを指摘しておく。

さて以上のマルサスとの往復書簡によつて、リカード体系の初期の形成における「ミル氏の原理」ないし「セー氏の学説」の主要役割が、「食糧をうることの困難の増大が利潤低下の唯一の永続的原因である」という理論を追証するにあつたことが、あきらかとなる。（Meek, *ibid.*, pp. 47-48）これにたいして、マルサスは、蓄積が有効需要の欠除を媒介として利潤に反作用をおよぼすにちがいないということ、すなわち「一般に蓄積の結果生じてくる利潤低下の原因としては、生産物の価格が生産の経費と比較して下落すること、いいかえれば有効需要が減退すること以外には知らなご」[Letter from Malthus to Ricardo 9 Oct. 1814; Works, Vol. VI, p141-2]と「さうこと」を証明すること

にたずさわつていた。そしてリカードは、需要が蓄積を制限するのではなく、蓄積が需要を創造するのであるという基本的な正しい立場⁽¹⁰⁾によつて、マルサスを反駁している。彼はいつている。「蓄積の欲求は、消費しようとする欲求とまさにおなじほど有効に、需要を生じさせるものです。それはただ需要がむかうところの対象を変更させるだけでしよう。」[*Ibid.*, 16 Sept. 1814; *ibid.*, p. 133]「資本の蓄積ということはそのがすでに、どこかに存在するところの、以前よりも多くの労働を雇う力を予想しています。それは、社会の総所得が増加され、したがつて以前よりも多くの食糧と商品とにたいする需要を創造することを予想していません。」[*Ibid.*, 23 Dec. 1914; *ibid.*, p. 148]と。

(10) 「シスモンディは、資本主義的蓄積を絶対に理解しなかつた。それで彼がこの問題についてリカードとかわしたはげしい論争においても、真理は、本質的には後者の側にあつた。リカードは、生産それ自身が自己のために市場をつくりだすと主張した。ところが、シス

モンディはこれを否定し、そしてこの否定にもとづいて自己の恐慌理論をつくりあげたのである。』(『レーニン』経済学的のロマン主義の特徴づけによせて』、全集第二巻一三六ページ、訳一三七ページ) シスモンディとマルサスとの恐慌論の質的差異はともかくとして、右のかぎりでは両者の立場は同一である。そしてリカードと直接論争した者は、いうまでもなく、シスモンディではなくてマルサスであった。

かくしてリカードは、最初には、それが彼自身の見解のために確実な論拠を提供するものであったから、セー法則を擁護したのである。(Meek, *ibid.* p. 48) として一八一五年二月の『低い穀物価格が資本の利潤におよぼす影響にかんする一論』(An Essay on the Influence of a Low Price of Corn on the Profits of Stock) においては、彼は、みずからの利潤理論を、この法則のたすけをかりることなしに、まったく教義的に提出している。すなわち、「富の進歩が価格にたいしておよびす唯一の効果は、農業か製造業かにおけるいつかの改良を別とすれば、あらゆる他の財貨をその元の

価格にとどめておいて、粗生産物および労働の価格を騰貴せしめ、労賃の一般的騰貴の結果として一般的利潤を下落せしめる、ということにあるようにおもわれる。』(Works, Vol. IV, 10, 20) 。

リカードの『低い穀物価格が資本の利潤におよぼす影響にかんする一論』は、いうまでもなく、その直前に出されたマルサスの『地代の性質と増大、および地代決定の原理にかんする研究』(An Inquiry into the Nature and Progress of Rent, and the Principles by which it is regulated, 1815) および『外国穀物輸入制限政策にかんする意見の根拠』(The Grounds of an Opinion of the Policy of Restricting the Importation of Foreign Corn, 1815) に対抗して、穀物条例論争における自己の立場を公けにしたものであるが、同時にその基礎理論としての差額地代法則がここにはじめて定式化されたのである。マルサスは、地代の生ずる基本的な原因を、「土地のうえに使用された人々の生活の維持のために要す

るよりも、いつそう大なる生活必需品をもたらさうるところの、土地の性質「および「みずからの需要を創造しようという、生活必需品の特性」にもとめてい

(Malthus, *An Inquiry into the Nature and Progress of*

Rent, p. 8) が、それは地代を自然の賜物とみなすフィ

ジオクラートの見解への逆転であることはいうまでもない。これにたいしてリカードは、地代は、人口の増

加にともない肥沃度および位置の劣つた土地を耕作にひき入れねばならぬ結果として低下した利潤——それが

資本の一般的利潤を規則するのであるが——と従来土地における利潤との差から発生し、増大すること

をあきらかにしている。したがつて、「地代は、あらゆるばあいにおいて、あらかじめえられた利潤の一部である。それはけつして収入の新創造ではなく、つねに、すでに創造された収入の一部分である。」

(Works, Vol. IV, p. 18)

このような、地代の本質にかんするマルサスの重農

主義的見解の清掃にもついで、彼は、さきに未解決のままのこされていた「生産物の価格」の問題を、「財貨の交換価値」という表現で、つぎのように規定している。すなわち、「あらゆる財貨の交換価値は、その生産の困難が増加するにつれて騰貴する。かくてもし穀物の生産においてより多くの労働が必要であることからして、あらたな困難がおこり、他方、金、銀、毛織布、麻布などの生産にはより多くの労働が必要でないとするなら、穀物の交換価値は、それらもの比較して、必然的に騰貴するであろう。反対により少い労働をもつて同一の生産物をあたえるであろうところの、穀物の、またはその種類のいかんを問わずその他の財貨の、生産における便宜は、その交換価値を下落せしめるであろう。」(Ibid., p. 19) といふ、さらに「競争が十分に作用することができ、かつ財貨の生産が、ある葡萄酒のばあいのように、自然によつて制限されていないときには、いつでも、その生産の困難または

便宜が、財貨の交換価値を終局的に規制するである
う。』(Ibid., p. 20)と記している。これらのことは、
リカードが、穀物価格ないし労賃の騰貴は財貨の価格を
騰貴させる——そのときには利潤率の下落は不明瞭と
なる——という、当時一般に承認されていた見解を克
服して、交換価値を規制する原理として労働量のみを
みとめようとしはじめていることをしめすものである。
しかしそれは、あとに引用した箇所への註に「す
べての財貨の価格は資本の一般的利潤をふくめてのそ
の生産費によつて終局的に規制され、かつつねにそれ
に帰着しようとしている。」(Ibid.)と書かれているこ
とからあきらかなように、なお生産費説であつて、労
働価値説はいまだうち立てられていない。ともかく、
いまや、彼の利潤理論は、以上のような地代論および
交換価値論の土台のうちにすえられることになつたの
である。

『一論』出版後、リカードは、ミルのすすめにした

資本蓄積および恐慌にかんするリカードの理論とセーの市場法則(松田)

がつて、自己の「地代・利潤および労賃の原理」(Le-
tter to Trower, 29 Oct. 1815; Works, Vol. VI, p. 315)を詳
細に説くところの、あたらしい著述にとりかかったが、
その進行につれて、彼はますます価値ないし価格の問
題に悩まされることになつた。一八一五年十二月三〇
日のミルあての手紙で、彼は、「わたしはまもなく価
格という語によつて進めなくなることを知つていま
す。そのときにはわたしは、あなたの忠告と助力とを
乞わねばなりません。」(Works, Vol. VI, p. 348)といつ
ており、さらに、一八一六年二月七日のマルサスあて
の手紙では、「もしわたしが相対価値あるいは交換価
値の根拠および法則を、明瞭に理解するについての障
碍を克服しえたならば、わたしは半ば戦闘に勝利をえ
たものでしょう。」(Works, Vol. VII, p. 20)といつてい
る。だが、この困難はともかくも克服され、草稿の執
筆は進行して、この年の一〇月一四日に、『原理』の最
初の七章の基礎となつた「経済学の原理」の全部をふく

む草稿をミルに送つてゐる。ついで一月一七日までに、「課税にかんする研究」の部分を送附し、翌一七年三月のはじめごろまでに、スミス、セー、ブキャナン、マルサスなどにたいする「論争的な諸章」を書きあげてゐる。かくして、『経済学および課税の原理』（Principles of Political Economy and Taxation）初版は、一八一七年四月一九日に出版された。

『原理』においては、いうまでもなく、第一章において定立された労働価値法則の基礎のうえに、第二章から第六章までに「地代、利潤および労賃の自然のなりゆき」、すなわち、社会の発展にもなつて、穀物価格したがつて貨幣賃銀が騰貴し、それにつれて地代は増大するが、利潤は下落し、また実質賃銀も低下するという法則が展開されたのちに、第二章「利潤および利子におよぼす蓄積の影響」ではじめて、セー法則の問題がとりあつかわれている。すなわち、その冒頭で、「資本^{キャピタル}の利潤についてのべてきたところから、資

本の蓄積というものは、労賃を騰貴させるところのな んらかの永続的原因があるのでなければ、けつして永続的に利潤を低下させるものでないことがわかるであろう。」（Works, Vol. I, p. 289）とのべて、すでに展開した利潤理論を確認したのち、「しかるにアダム・スミスは、利潤下落の原因を一律に資本の蓄積およびその結果としておこる競争に帰し、附加資本が雇うべき労働者の附加数にたいして食物を供給する困難が遞増することについては、かつて言及したことがない。」

（Ibid.）と、利潤率低下の原因についての自己の見解——穀物価格したがつて労賃の騰貴のみがその原因である——にもとづいて、それについてのスミスの見解——資本の競争いいかえれば資本の過剰をその原因とする——を批判し、この理論を追証するために、「需要はただ生産によつてのみ制限されるものであるから、一国において使用されえない資本の額はない」（Ibid., p. 290）と、セーの法則を援用してゐるので

ある。したがつて、ミーケのいつているように、セー法則は、リカード理論にとつてけつして「基本的前提」ではなく、その「理論構造のうえにのみかきねられたもの」である (Meek, *ibid.*, p. 50) ⁽¹¹⁾ ことはあきらかである。もつとも、すでにみたように、セー法則がリカードにとつて、利潤率の低下にたいするマルサスの需給関係による説明を打破し、生産物の価格を、まず平均利潤をふくむ生産費によつて規定し、さらに究極的には労働による価値の決定という考えにいたる道をひらいたものである (時永淑「リカード経済学の生成とその労働価値論との関連」、『経済志林』第三卷第二号、一九五五年四月、三六ページ) ことはみとめられる。⁽¹²⁾

(11) ミークによれば、それにもかかわず、セー法則が、こんにちケインズによつて、いわゆる「古典派経済学者」の共通の標識とみなされえたのは、リカードの死後ブルジョア経済学界において急速におこなわれた、リカード経済学の基礎理論——なかんずく労働価値説——の放棄のためである。社会主義経済学——リカード派

資本蓄積および恐慌にかんするリカードの理論とセーの市場法則 (松田)

四一 (四一)

社会主義——の登場とともに、これに理論的武器を提供したところの、リカード体系の危険な要素は清掃されねばならなかつた。しかるにセー法則は、調和論的な帰結にみちびくものであるために、追放から生きのこつたのである、という。(Meek, *ibid.*, Part II)

(12) 時永氏はミークを批判して、「しかしリカード理論の形成という視角からすれば、セーの法則はたんにミーケのいえるような役割・意味にとどまらず、……当時のリカード理論の難点である「生産物の価値」決定の問題を解決するための前提条件として必須のものであつた。」(同誌同号、三八ページ)とされているが、それはもとより、セー法則がリカード体系にとつて基本的前提ではなかつたということ自体を、否定するものではないとおもう。

三

リカードは、「原理」第二章「利潤および利子におよぼす蓄積の影響」において、いう。「セー氏は、需要はただ生産によつてのみ制限されるものであるから、一国において使用されえないような資本の額はな

いということをもつとも十分に説明した。消費しまたは販売しようとする目的なしに生産するものはだれもない。そして直接自分にとつて有用であるか、または将来の生産に寄与しうる他の商品を購入しようとする意図なしには、だれもけつして販売しない。したがつて、ひとは、生産することによつて、必然的に、彼自身の財貨の消費者となるか、またはある他人の財貨の購買者かつ消費者となるかである。他の財貨の獲得という彼の目的を達するために、彼がもつとも有利に生産しうる商品について、長いあいだ知らずにいるなどということとは、考えられない。したがつて、それにたいして需要のない商品を、彼がひきつづき生産することとは、「おそろくないであろう。」（Works, Vol. I, p. 290）と。

マルクスは、これを評して、「こんな子供じみたおしやべりは、セーにこそふさわしいが、リカードにはふさわしくなご。」（Marx, Theorien, Bd. II, 2. S. 277. 長

洲二訳、国民文庫板、第二冊、二五三ページ）という。第一に、自分の生産物を消費するために——生産的消費のためにさえ——生産する資本家はひとりもない。ここでは、生産物が商品として生産されるということばかりでなく、社会的分業の存在さえも忘れられている。人が自分自身のために生産するような状態においては、たしかに恐慌は存在しないが、そのばあいには資本制生産も存在しない。つぎに、商品の販売は、自分にとつて有用であるかまたは生産に寄与しうる他の商品を購入するためになされるのではなく、商品資本を貨幣資本に再転化し、それによつて剰余価値を実現するためになされるのである。消費はけつして資本制生産の目的ではない。さらに、すでに生産した人には販売するかしないかをえらぶ自由などはない。彼は販売しなければならぬ。ところが恐慌のさには、彼が販売できない状態が、または生産価格以下でのみ販売しなければならぬ状態が、発生するの

である。(aa. O.S. 277-278, 訳、二五三ページ)最後に、生産の無政府性を特徴とする資本制生産においては、生産者は自分の商品にたいする需要を知らない。それにたいして需要がないことを知るのは、まさに恐慌においてである。したがって、リカードのいうところの、需要は生産によつてのみ制限されるから、資本の過剰はありえないということは、消極的な意味——すなわち生産される以上には消費されえないということ——においては正しいが、積極的な意味——すなわち生産されただけのものが消費されるということ——においては誤っている。反対に、生産が、現存する消費の限界を顧慮することなしにおこなわれ、ただ資本によつてのみ制限されるということが、資本制生産様式の特徴なのである。(cf. aa. O.S. 299, 訳、二七九ページ)

さて、リカードはすすんでいう。「生産物はつねに生産物または勤労によつて購買されるのであるから、貨幣はたんに交換をおこなう媒介物にすぎない。ある

資本蓄積および恐慌にかんするリカードの理論とセーの市場法則(松田)

特定の商品があまりにたくさん生産されて、それについてやされた資本をつぎ足さないような供給過剰(glut)が市場におこるといふことは、あるかもしれない。しかし、こういうことがすべての商品についておこるといふことは、ありえない。」(Works, Vol. I, pp. 291-292)

と。これは、まさにセー法則のくりかえしにすぎない。ここでは第一に、交換価値と使用価値との対立をふくむ商品が、たんなる生産物(使用価値)にかえられており、それゆえ商品の交換が、たんなる生産物交換(物々交換)にかえられている。資本制生産以前にだけでなく、単純商品生産以前にさえ逆もどりしている。生産物が商品であり、したがってまず自らを貨幣であらわし貨幣に転形されるという変態過程を通過せねばならぬという、資本制生産様式の前提条件が否認されているのである。また、賃労働ということばかりに勤労ということばかりがつかわれてはいるが、勤労とはもつぱら使用価値を生産するものとして考えられた

労働のことであつて、それは交換価値の生産とくに剰余価値の増殖を本領とする資本制生産においては第二義的なものにすぎない。さらに貨幣はたんなる交換の媒介物として、すなわち流通手段としてのみ把握されており、すべての商品の一般的な等価としての、いいかえれば交換価値の自立的な存在としての、貨幣の本質は、また価値尺度としての貨幣の機能は、まったく見落されている。（Marx, Theorien, Bd. II. 2. S. 275-276. 訳、二五〇—二五二ページ）

いふまでもなく、商品の交換過程は二つの変態、商品の貨幣への転形すなわち販売と貨幣の商品への再転形すなわち購買とからなりたつ。すなわち $W-G-W$ である。この商品流通は、形式的にばかりでなく、本質的にも、直接の生産物交換 $W-W$ と異つてゐる。商品流通は、生産物交換のばあいにもみられる自分の労働生産物のゆずりわたしと他人のそのゆずりうけとのあいだの直接的同一性を、販売 $W-G$ と購買 $G-W$ と

に分裂させることによつて、生産物交換の時間的・場所的および個人的な限界をうちやぶる。販売と購買とは、一商品の二つの変態として相互に補足しあい、内的に統一されているものであるが、しかも相対立する相互に自立的な過程である。この販売と購買との自立化が、外的な対立として一定の点まで進行したときに両者の統一を強力的に恢復する過程が、恐慌である。だから商品流通は、恐慌の可能性を、しかもただその可能性のみをふくむのである。（Marx, Das Kapital, Bd. I. S. 110-119. 長谷部訳(1)(二二二—二三四ページ)したがつて、セー——リカードの命題は、商品流通にふくまれるところの対立を否定してその統一にしがみつくものであり (a. a. O. S. 274. 訳、二四九ページ)、結局資本制生産そのものを否認して、もしそれがその未成熟な初期よりもさらに以前の生産様式であつたならば、それに固有な対立と矛盾とは存在せず、したがつてまたそれらが恐慌となつて爆発することもないはずだ、と

いおうとするものである。(Ga. O.S. 274-275. 訳、二五〇ページ)

さらに、リカードのいうところをきこう。「ある特定の商品があまりにたくさん生産されて、それについてやされた資本をつぐなえないような供給過剰 (glut) が市場におこるといふことは、あるかもしれない。しかし、こういうことがすべての商品についておこるといふことは、ありえない。穀物にたいする需要はそれを食うべき口の数によつて制限され、靴や上衣にたいする需要はそれを着る人の数によつて制限される。しかし社会が、または社会の一部分が、その消費しうるだけの、または消費したいとおもうだけの穀物や帽子や靴をもつことはあるとしても、自然または人間の技術によつて生産されるあらゆる商品についてはおなじことはいえない。ある人々は、もし葡萄酒を手に入れる能力があれば、それをより多く消費するであろう。十分の葡萄酒をもっている他の人々は、その家具の数を

ふやすか、またはその質をよくしたいとおもうであろう。他の人々は、その庭をかざつたり、その家を大きくしたりしたいとおもうであろう。これらのことすべてまたは一部をしたいという願望は、あらゆる人々の胸にうえつけられている。必要なものはただ手段だけであり、そしてこの手段をあたえうるものは、生産の増加以外にはないのである。」(Works, Vol. I, p. 292)

市場の供給過剰をきたしうるものは、特定の商品だけであつてすべての種類の商品ではなく、したがつて過剰生産はつねに部分的であつて、一般的過剰生産はありえないといふのは、あやまりである。商品の貨幣への転形の困難はすべての商品にとつて存在するものであり、商品の姿態の一般的性質——それは販売と購買との統一とともにまたその分離をもふくむ——は普遍的供給過剰の可能性そのものである。さらに一般的過剰生産を回避するために部分的過剰生産を強調するのならば、つぎのことが指摘されうる。第一に、商品の

過剰はつねに相対的であつて、すなわち一定の価格では過剰なのである。すべての商品が物価崩落に参加し下落した価格で市場に吸収される。第二に、恐慌が一般的であるためには、それが主導的な諸商品をおさえばたりる。(Marx, Theorien, II. 2. S. 292-293. 訳、二七〇—二七二ページ)

リカードは、商品によつてみだされる欲望は無限であり、これらすべての欲望が満たされることはないのであるから、そしてこの欲望をみたすために必要なものは手段だけであり、この手段は生産の増加によつてはじめてつくりだすことができるものであるから、一般的過剰生産というものはありえない、という。こんなことがすべていつたいなんになるのか。過剰生産の時期には、国民のうちの大きな部分（とくに労働者階級）があたえられる穀物や靴や上衣等々は、どんなときよりも少い。まして葡萄酒や家具については、いうまでもない。もし、すべての国民がもつとも必要な欲

望だけでもみたしたのちでなければ過剰生産は生じえないのだとしたら、資本主義社会の歴史においては、一般的過剰生産はおろか部分的過剰生産さえも生じえなかつたはずである。そもそも過剰生産が絶対的欲望となんの関係があろうか。それに関係があるのは、支払能力ある欲望だけである。問題は絶対的過剰生産ではなくてただ相対的過剰生産にすぎない。したがつて、市場で在貨が過剰な商品にたいして、まだみだされない欲望が存在するということによつては、けつして一般的過剰生産を否定することはできない。(Ca. O.S. 294-295. 訳、二七三—二七五ページ)

以上に見たように、リカードは、セーの市場法則を採用し、資本制生産、とくにその前提条件たる商品流通にふくまれる対立的契機を否認することによつて、一般的過剰生産、したがつて恐慌を否定している。彼がみとめるものは、ただ部分的過剰生産のみにすぎない。

いわゆるセー法則あるいは販路説なるものは、¹⁾ しながら、けつしてセーの創始したものではない。その

原型は、²⁾ 重農主義者、とくにケネーにある。(中野正

「均衡論的歪曲の発生」(『経済評論』一九四八年六月号、二九

ページ、平瀬巳之吉『経済学の古典と近代』、三一七、三三二

ページ等、参照)ケネーはいう。「すべての購買は販売で

あり、すべての販売は購買である。」(『農業・商業・財政

評論』Ⅻ「商業について」H氏とN氏との対話第二)、『Gouv-

res Économiques et Philosophiques de F. Orustay, p. 478.

島津亮二・菱山泉訳『ケネー全集』第三卷、二七七ページ、なお

この章句は、マルクスが『資本論』第一卷第一編第三章註六六

に引用しているところである。』と。この命題は、³⁾ たんに

一個の過程が二面的な過程——商品所有者の側からは

販売、貨幣所有者の側からは購買——であるというこ

とをいみするだけではない。それはさらに、販売と購

買との、供給と需要との、量的一致のいみをもつ。そ

れゆえ、「生産物は生産物をもつてのみ買われる。」
資本蓄積および恐慌にかんするリカードの理論とセーの市場法則(松田)

(Say, Traité d'économie politique, p. 306) としう、セー
の販路説に連繫するわけである。

¹⁾ 平瀬氏はこの命題を、「販売＝購買一致にかんするケ

ネー命題」(前掲書、後編第四章)と名づけられてい

る。

このことは、抽象的にいえば正しい。貨幣を媒介と

する商品流通においても、それが正常に経過するかぎ

りは、このように前提してさしつかえない。事実、価値

論、さらにまた剰余価値論は、等価値同志の交換、し

たがって需要と供給との一致の前提のうえに、なりた

つものである。そのかぎり、商品流通は、生産物交換

の論理に還元されうる。しかしながら、現実の商品流

通はこれと異なること、すでにのべたとおりである。商

品の貨幣への転形すなわち販売は、「商品の命がけの

飛躍」である。流通に投げ入れられた商品は、もしそ

れが貨幣としてでてこないならば、商品として無用と

なる。しかも商品流通においては、他の人が購買しな

ければ、だれも販売することはできないが、だれも、彼自身が販売したからとて、すぐに購買する必要はない。° (Marx, Das Kapital, Bd. I, S. 118, 訳、二三四ページ) ここに販売と購買との分裂の可能性があらわれ、恐慌の形式的可能性がうまれる。

だから、ケネーの命題が誤つていのではない。それを恐慌のような、資本制生産の高度に現実的な事象の否定に利用したことが、誤りなのである。⁽¹⁴⁾ しかるに

セー——ジエームズ・ミル——リカード等の販路説においては、販売と購買との一致という命題と一般的過剰生産の否定とが分ちがたくむすびついている。この点、重農主義のばあいと相異するとおもわれる。⁽¹⁵⁾

(14) 「販路説はこの「単純商品流通の論理が立脚する」、与件にたちながらそれを自覚しないで与件外のやるべからざる発言をやつてのけたから、つまり、単純商品流通の抽象的な論理がそのまま恐慌のような現実的商品流通の場の論理でもありうるのだと誤認したから、やがて現実的商品流通を生産物交換にすりかえて恐慌を否

定することとなつたわけである。」(平瀬巳之吉『経済学の古典と近代』、三三四ページ)

(15) 平瀬氏は、「一部の論者がこんにち神聖なるリカードオと俗流的愚物セーとの連関をたちきろうと」「努力」しているが、「だんに「マルクス坊主のセーぎらい」という眼識狭少の傾向意識だけで」「古典」経済学の共同戦線からセーを失つてはならないだろう。けれどセーを失なう論理は煮つめてゆけばやがてその原型ケネーを失なう論理に通ずるわけだから。」(前掲書、三三五—三三六ページ)とされているが、同意しがたい。

ところで、セーの説くところ、リカードののべるところとは、一見おなじことのようにおもわれる。セーはいう。「もしもいくつかの種類の商品の滞貨、つまり過剰があるとすれば、それはこれらの商品と交換される他の商品が必要だけ生産されなかつたからにほかならず、……ひとくちにえば、ある種の生産物が過剰だということは、他の種類の生産物が充分でないからにはかならない。しかるにあなた(マルサス)はすべての種類の商品の過剰が同時に生じうると主張

される。」(J.B. Say, *Letres à M. Malhus*, 中野正訳『恐慌
に関する手紙』一八一—一九ページ)と。またリカードはい
う。「ある特定の商品があまりにたくさん生産され
て、それについてやされた資本をつぐなえないような供
給過剰が市場におこるといふことは、あるかもしれない
い。しかし、こういうことがすべての商品についてお
こるといふことは、ありえない。」(*Works*, Vol. I, p.
292)と。ここから、セーとリカードとは部分恐慌の立
場をとるものとして一括され、両者の差別はほとんど
かえりみられなかつた。その差異を指摘されたのは、

中野正(『均衡論的歪曲の発生』(『経済評論』一九四八年六
月号)および豊倉三子雄(『リカードの部分的過剰説』
『経済学論究』九四八年七月)の両氏である。しかし両
氏の基礎づけは、若干異つているようにおもわれる。

まず、すでにのべたように、セーが効用価値説の立
場をとるものであることが注意されなければならぬ
(16)。それゆえ、セーにおける、「生産物は生産物をも

資本蓄積および恐慌にかんするリカードの理論とセーの市場法則(松田)

つてのみ買われる。」という命題は、実は「効用は効用
をもつてのみ買われる」と意味にほかならず、また「生
産物の販路をひらくものは、これひとり生産のみであ
る。」という命題も、「効用の販路をひらくものは、ひ
とり効用をうむ生産的奉仕セルヴィスのみである。」という意味の
ものとなる。かくては、まえの命題は、年生産物価値
の可除部分としての一定量の労働相互間の交換という
本来の意味を失つて、価値の源泉にかんするあやまつ
た見解を導入することとなり、あとの命題も、再生産
過程の原基的脈絡の把握としての本来の意義を失つ
て、不生産的なサーヴィスもまた販路を拡大するとい
う反対命題に転化される。(中野、前掲、二七ページ)
労働量による価値規定の立場にたつリカードが、これ
と根本的に異なることはいうまでもない。

(10) 豊倉氏は、セーは主観的な効用価値説をとるのである
から、いうところの過剰は絶対的欲望とくらべての過
剰であり、しかも効用なき絶対的欲望をみたさぬ商品
は真の生産物ではないから、商品の部分的過剰そのもの

のさえ疑わしいものとなる。しかるにリカードは、労働量による価値規定をあきらかにしたばかりでなく、市場価格の平均利潤がふくむところの自然価格（生産価格）からの一時的偏倚とそれへの帰一の過程のうちに、部分的過剰を明確に把握している（前掲、四六一—四八ページ）、とされている。しかし、すくなくとも最後の点——リカードが平均利潤率成立の機構のうちに、部分的過剰を把握したとされる点——は問題であるとおもう。

リカードとセーとの恐慌にたいする見方の根本的差異は、つぎのリカードのマルサスあての手紙のなかにしめされている。「この人たち（セーとトレンズ）はともに、市場にでている商品がそれなくしては購買されえ（ない）ところの、いま一方の組の商品が生産されないところから、商業における停滞をおこるものだと考えているようにみえます。そしてこういう他方の商品が市場にでてくるまでは、右の弊害は除去されないと推論するようにおもわれます。しかしながら真実の救済策はきつと将来の生産を調節することに存する

でしょう。ある商品の供給過剰が存在するときは、それをより少く生産し、他のものをより多く生産すべきであつて、よりつよく欲求されているところの商品を購買者がすすんで生産するにいたるまで、供給過剰を存続せしむべきではありません。」（4. Sept. 1820; Works, Vol. VIII. pp. 227-228）リカードのいう意味は、セーのいうようなあれこれの生産部門内のたんなる供給過剰ないし供給過少は、資本の移動によつてなされる利潤率の均等化の機構のなかに吸収されるものであり、それ自身平均利潤率の成立を媒介する事情であつて、偶然的事情にもとづく固有の部分的恐慌の原因となりうるものではない、ということである。これを逆にいえば、セーの意味で、生産部門間の不均衡にもとづく部分恐慌をみとめることは、利潤率均等化の機構すらわかつていないことにはかならない。（中野、前掲、三〇—三一ページ）しかもセーは、このような理論をもつて、恐慌を生産部門間の不均衡によつて

説明するところの、現代の景気・恐慌理論の一つの流れ——過少消費説や貨幣的景気論に対立するところのいわゆる不比例説——の祖となつてゐるのである。

もつとも、リカードが例外的に、必需品のみについてではあるが、普遍的供給過剰の可能性をみとめてゐる、一つのばあいがある。それは、資本の蓄積によつて、自然労賃（労働の自然価格）は変化しないが、市場労賃が自然労賃以上に騰貴することによつて、利潤が低下するばあいである。リカードはつぎのようにいつてゐる。「食物の価格が低いにもかかわらず、資本の蓄積が利潤の下落によつてもなわれうるただ一つのばあいがある。そしてそれは一時的であろう。それは労働維持のための基金が人口よりもはるかにすみやかに増加するばあいである。そのときには労賃は高く、利潤は低いであろう。もしも各人が奢侈品の使用をやめ、蓄積にのみ専念するならば、ただちに消費しえなほどの数量の必需品が生産されるであろう。このよ

資本蓄積および恐慌にかんするリカードの理論とセーの市場法則（松田）

うに数において制限されている商品についていへば、疑いもなく普遍的供給過剰 (universal glut) がおこりうるのである。そしてその結果として、かかる商品の附加的分量にたいする需要もありえなければ、またより多くの資本の使用にたいする利潤もありえないであろう。もし人々が消費することをやめるとすれば、彼らは生産することをやめるであろう。しかしこのことを承認したからとて、一般的原理を傷けることにはならなう。」(Works, Vol. I, p. 292-293) と。しかしこれは、必需品にだけだけの、したがつて全商品についていへば部分的な過剰であるばかりでなく、必需品にたいする需要が制限されてゐるところからおこる供給過剰であつて、やがて必需品の生産が縮小され、奢侈品の生産が拡大されるにいたれば解消するところの、一時的な過剰にすぎない。(豊倉、前掲、五〇—五一ページ、参照)

しかるにリカードは、資本の過剰ということを一

個の可能性としては、完全にみとめている。「かくして一国において、生産的に使用されえないほどの資本額が蓄積されるということは、必需品騰貴の結果労賃が騰貴して、その結果資本の利潤としてのこされるものが、蓄積にたいする動機をなくしてしまうほどわずかとなるまでは、ありえないことである。」(Ibid., p. 290) これはいうまでもなく、利潤率の低落にたいするリカードの独特の把握から必然的にみちびきだされる結論である。リカードによれば、社会の発展とともに、穀物はそれを生産するためにより多くの労働が必要となるからその価格が騰貴し、労賃は穀物価格の騰貴とともに必然的に騰貴するから、利潤は下落するであろう。しかもこのことは製造業においてのみならず、農業においてもおこるであろう。なぜなら穀物価格の騰貴は、地代の増加または労働者の附加数に比例するにすぎず、労賃の騰貴にたいするつぐないをしないであらうからである。(Principles, Ch. IV; *ibid.*, pp. 110-111)

「しからば、利潤の自然的傾向は下落することである。けだし、社会と富との進歩につれて、必要とされる食物の附加的分量はますますより多くの労働の犠牲によつてえられるからである。」(Ibid., p. 120) 利潤のこの低下傾向は、農業技術の進歩によつてときに妨げられる。しかしながら、必需品の価格および労賃の騰貴には限界がある。なんととなれば、労賃が利潤と労賃とに分たるべき価値総額に等しくなるやいなや、すなわちいかなる資本も利潤を生じえなくなるやいなや、蓄積は終りをつけなければならぬからである。実際にはこの時期のはるか以前に、きわめて低い利潤率がいつさいの蓄積を停止させてしまうであろう (Ibid., p. 120) というのである。リカードはこのような蓄積の極限においてのみ、資本の過剰というものをみとめているのである。

したがつて、それはもちろん、現実的な問題とは考えられていなかった。⁽⁷⁾「資本の使用が若干の利潤でも

もたらすあいだは、誤算によるほかは、需要のないものが生産されることはありえないとは、わたしもたしかにのべたことがありますが、理論上からいつて、生産が非常におしすすめられ、その結果資本家がおなじ規において生産を続行すべき動機が破壊されるにいたることはありえない、とはのべたことがありません。生産はおそらくそれほどおしすすめられることがあるだろうとおもいますが、われわれの時代においてそれを自撃したことはありません。」(Letter to Malthus, 21

July 1821; Works Vol. IX. p. 26)と、彼はこういっている。リカードにとつては、現実の恐慌——一八二五年にはじまる資本制的な循環性恐慌にさきだつ、一八一五年および一八年のいわゆる過渡的恐慌——は、これを、豊作と大陸封鎖の解除にともなう外国穀物の流入による穀物価格の暴落、および戦争から平和への移行にともなう「一部門から他の部門への資本の移動」(Works, Vol. I. p. 263)、すなわち彼のことばによれば「貿易の通路

における突然の変化」(第一章標題)から、説明しようものごであった。(Marx, Theorien, Bd. II. 2. S. 270. 訳、二四五ページ参照)

二四五ページ参照)

(17) 中野正氏は、「リカードは彼自身が理論的に正しく過剰蓄積と規定し、そして事実上おこりえないとした一般の恐慌が、彼の晩年ようやく展開しつつあった事実には気がつかなかつたといひうる。」(前掲、三一ページ)として、リカードが資本の過剰を理論的に承認したことの意義を強調され、これをもつて、マルクスが『資本論』第三卷第三編第五章「利潤率の低下傾向の法則の内的諸矛盾の展開」において展開した資本の絶対的過剰生産の規定——氏はそれがマルクスの現実的恐慌の規定であるとされる——の先駆とみなされるものようである。(前掲三六ページ)これは氏が、宇野弘藏氏の恐慌論(『資本論の研究』(一九四九年)所収の諸論文および後年の『恐慌論』(一九五三年)等における)に依拠して、利潤率の低下を恐慌への本質的矛盾の基本的要因とみなされるからであるが、しかしそのような恐慌把握は、すくなくとも、恐慌の基本的原因を生産の社会的性格と資本主義的占有形態とのあいだの矛盾にみだし、資本制生産様式のこの基

本的矛盾が、剰余価値生産の条件とその実現の条件とのあいだの矛盾——前者は社会の生産力によつてのみ制限されるが、後者は生産諸部門間の比率性と社会の消費力によつて制限され、そしてこの消費力は大衆の狭隘な消費限界と蓄積衝動によつて、制約される——に現われることによつて、過剰生産恐慌を必然的たらしめるとなすところの、マルクス主義的恐慌論のオーソドックスは理解からは外れたものであつて、それゆえにまた、リカードにおける資本の過剰の意義を氏のように解釈することにもわかに賛同しがたい。

いままでは、リカード理論の形成過程においてセー法則がもつた意義、およびセーとリカードとの過剰生産の把握の差異、についてのべてきたところからすでにあきらかであるように、セーとリカードとは、販路説のその理論構造にたいしてもつ意義は、まったく異つてゐる。セーにおいては、販路説にもとづく一般的な過剰生産の否定は、彼の経済学全体の性格がさうであつたように、あきらかに資本制生産の矛盾を隠蔽するところの弁護論として役立つものであつた。しかるに

リカードにおいては、販路説はむしろ進歩的な彼割になつてゐた。それは、資本蓄積があまりにはやくすすむと商品の一般的過剰をひきおこすかもしれないと論じていた、地主その他の不生産的消費者の代弁者たち（マルサス等々）にたいする非常に有効な解答だったのである。そればかりではない。すでにみたようにセー法則は、ケインズが想定したのとは異つて、「リカード経済学にとつて基本的なもの」ではけつしてなかつた。それは、基礎的な理論構造の本質的な要素というよりは、むしろ、政治的な理由によつてその構造のうえにつみかさねられた一要素だったのである。

（ロンド・L・ミーク「経済思想史におけるケインズの位置」『ザ・モダン・クォーターリー』第六卷第一号、『経済評論』一九五五年四月号一三七ページ、なお前出 R. L. Meek, *The Decline of Ricardian Economics*, *Economica*, Feb, 1950, p. 50 参照）

リカードのいいたかつたことは、要するに、「かくし

てこれらのことがらを承認すれば、需要には限度がなく、——資本がなんらかの利潤をうみだしているあいだは、資本の使用には限度がなく、また資本がいかに豊富になつても、労賃の騰貴のほかに利潤の下落にたいする適当な理由はない、ということになる。そしてさらに、労賃騰貴の唯一の適当かつ永続的な原因は、増加しつつある労働者数にたいして食物および必需品を支給する困難の遞増であると、つけ加えうるだろう。』(Works, Vol. I, p. 296)と云うことであつた。くりかえしていえば、販路説はリカードにとつては、ただ有効需要が供給におよばないときには、商品の過剰、したがつてまた資本の過剰が生じ、利潤はこの原因から低落するというマルサスの主張を論破して、利潤の低下は、ただ穀物価格の騰貴にもとづく労賃の騰貴によつてのみ生ずるといふ、自己の分配理論——正確には資本蓄積論——を補強するための道具にすぎなかつたのである。

資本蓄積および恐慌にかんするリカードの理論とセーの市場法則 (松田)

ところで、すでにみたように、販路説は直接には販売と購買との一致を意味するだけであつて、論理的にはかならずしも一般的過剰生産の否定を意味するものではない。販路説が恐慌否定論となりきるためには、なお二つの論理的支柱を必要とした。すなわち、商品の価値構成にかんする「アダム・スミスのドグマ」と平均利潤率成立の機構としての資本・労働の可動性の論理とが、それである。(平瀬、前掲書三三三ページ)

リカードが「アダム・スミスのドグマ」を完全に踏襲していることは、すでにのべたとおりである。「あらゆる国の土地および労働の全生産物は三部分に分たれ、そのうち一部分は労賃に、他の部分は利潤に、そしてこの部分は地代にあてられる。」(Works, Vol. I, p. 34) それゆゑ、リカードにおいてもスミスと同様に、生産物価値は $\kappa + \rho$ (可変資本と剰余価値) に区分され、 c (不変資本) は無視されているわけである。いいかえれば、生産物の価値は、すべて所得、す

なわち労賃・利潤・地代に分解されるのである。したがつて、生産Ⅱ所得。そして単純再生産のばあいには所得はすべて消費される。すなわち、所得Ⅱ消費。かくして生産Ⅱ消費ということになる。（平瀬、前掲書、三五六ページ）もちろん、この生産Ⅱ消費というばあいの消費のうちには、生産的消費と個人的消費との二つの異つた概念をふくんでいなければならぬ。しかし、スマス——リカードでは、生産元本としての不変資本は生産物価値のうちに存在しないのであるから、生産物はすべて所得として個人的に消費されることとなる。ともかく、このような論理によつて、販路説は、生産と消費との一致を前提して、恐慌を否定することができるのである。

つぎに、リカードの体系が、平均利潤率の存在を前提とするものであることも、すでにのべたところである。そしてその利潤率均等化の機構が、諸資本の競争すなわち資本・労働の自由移動であることは、いうま

でもない。この論理はリカードにおいて確立する⁽¹⁸⁾。

（平瀬、前掲書、二六五—二六九ページ、参照）

(18) 平瀬氏はこの論理を、「資本・労働の可動性にかんするリカード命題」（前掲書、後編第六章）と名づけておられる。

リカードは、商品の市場価格のその自然価格——それは平均利潤率の存在を前提とするところの生産価格にほかならない——を中心とする運動が、資本の移動によつておこることを、つぎのようにのべている。「資本がたまたま需要されているさまざまな商品の生産にたいして、過不足のないちようど必要な分量において正確に割当てられるのは、ただかかる変動の結果としてにすぎない。価格の騰落とともに、利潤はその一般的水準以上に騰貴し、またはそれ以下に下落する。そして資本は、そこで変動がおこつたところの特定の用途に流入するように刺戟されるか、またはそこから退去するように警告されるのである。」と。またいう。

「あらゆるものがその資本をその好むところに自由にもちいえるあいだは、彼は当然その資本の爲にもつとも有利な用途をもとめるであろう。…あらゆる資本使用者の側におけるより不利な事業をすててより有利な事業にしようとするこの不断の願望は、すべてのものの利潤率を均等ならしめる……つよい傾向をもつてゐる。」(Principles, Ch. IV; Works, Vol. I. pp. 88-89)。

もつとも、リカードがのべているところは、資本の移動による平均利潤率の成立そのものではなくて、平均利潤率の存在を前提とする市場価格の生産価格を中心とする運動だけにすぎない。彼は、価値の生産価格への転化の運動については、すこしもこれを知らず、平均利潤率を前提してかかるばかりか、自然価格(生産価格)を価値と同一視してゐる。(Marx, Theorien, Bd. II. I. S. 60-62. 訳(2)七八一八〇ページ)

ともかくこのような論理によつて、資本家の「誤算」による「一時的」現象としての、部分的過剰(および

部分的過少)は肯定されるが、一般的過剰は否定されることになる。なぜならば、過剰に生産された商品の市場価格は自然価格以下に下落し、それがふたたび自然価格に回復するまで、資本はいつそう有利な用途にむかつて移動するからである。かくして、市場価格は自然価格と一致し、平均利潤率がふたたび実現され、部分的過剰は一般的過剰となることなくして解消するといふのである。(平瀬、前掲書、三七六ページ)もつとも、このような論理によつて恐慌を否定しうるものではないことは、それが社会の消費限界をまつたく無視していることだけによつても、あきらかであろう。そしてリカードが、このような特定の部門におけるたんなる供給過剰を、固有の部分的恐慌の原因とみなしていなかつたことも、またすでにみたところである。

それはともかく、このような、生産物交換の論理である販路説と、生産消費をとくスキスのドグマと、そして最後に平均利潤実現の機構である資本・労働の

可動性命題と、これら三本足の論理によつて、恐慌が終局的に否定されることになるのである。（平瀬、前掲書、三七七ページ）

しかるに注目すべきことには、リカード自身によつて、この論理の鼎の一脚が、やがてとりさられることになるのである。それはリカードの再生産論の基礎的前提となつていた「アダム・スミスのドグマ」を、彼がみずから止場することとなつたからである。彼が第三版（一八二一年）においてはじめて附加した第三章「機械について」においてである。

機械の社会経済的影響についてのリカードの意見は元来、「労働節約の効果のあるような機械がいずれかの生産部門に採用されることは、全体の利益となるものであつて、これにともなう不便は、たいていのばかり、労働および資本をある用途から他の用途に移すことにともなう不便にすぎない。」（Works, Vol. I, p. 386）といふことであつた。なぜなら、機械使用の結果とし

ての商品価格の一般的低廉の利益は、地主・資本家・労働者のいずれにもおよぶものであるし、また機械の使用によつて生産性の増大した部門で若干の労働者が解雇されるとしても、「彼らを雇傭していた資本はいぜんとして存在し、かつこれを有するものは、これを生産的に使用することを利益とするのであるから、……この資本はなんらかの別の商品の生産に使用されるであらう。」（Ibid., p. 387）といふことであつた。これは労働者を駆逐する機械は、つねに、それと同数の労働者を就業させるにたる資本を遊離させるといふ、補償説である。しかるにその後「だんだんと考えてくるうちに」、彼の理解は労働者階級にかんするかぎり根本的に変化し、『原理』第三版の「機械論」においては、「機械の使用はしばしば彼らの利益にたいして有害であるという労働者階級のいだいてる意見は、偏見または誤謬にもとづくものではなくて、経済学の正しい原理に一致するものである。」（Ibid., p. 392）と結論する

にいたつた。

その理由は、「わたしの誤りは、社会の純所得が増加するときは、その総所得もかならず増加するであろうという仮定から生じた。しかしながら、わたしはいま、地主と資本家とがその収入をうる一つの基金は増加しながら、同時に、労働者階級が主として依存するところの他の基金は減少することがありうることを納得すべき十分な理由をみとめるのである。したがつてもしわたしが正しいならば、一国の純収入を増加させうるのとおなじ原因が、同時に人口を過剰ならしめ、労働者の状態を悪化させることがある、ということになるのである。」(Ibid., p. 388)と云うことであつた。おなじことを彼はまた、「人口を養ひ、労働を雇ふする力は、一国の純生産物に依存しないで、つねにその総生産物に依存するものであるから、労働にたいする需要は必ず減退し、人口は過剰となり、労働者階級は窮乏・貧困の境遇におちいるであろう。」(Ibid., p. 390)とも

いつている。すなわち、彼は、総生産物と総所得、お

よび、純生産物と純所得とを、おなじ意味にもちいてるのである。しかしながら、いうまでもなく、総生産物とは生産された生産物全体のことであつて、その価値は不変資本+可変資本+剰余価値に等しい。これにたいして、総所得は、総生産物のうち消費された不変資本を補填する価値部分を控除したのこりのもの、すなわち、労賃+利潤+地代に等しい。また、純所得はそのうちの剰余価値部分を意味する。(Marx, Das Kapital, Bd. III, S. 894-895, 訳③一一八三—一八四ページ)したがつて、リカードはここではまだ、生産物価値を労賃・利潤・地代に分解するところの、従来の謬見を脱却していないわけである。

ところで彼が、労働にたいする需要は、資本家や地主がその収入をうる基金たる純所得ではなくて、総所得に依存するというのは、もとより、後者が前者にはふくまれないところの労賃部分をふくむからであるが、

しかしそれはあきらかに混乱であつて、労働者を雇傭するものは、所得ではなくて資本でなければならぬ。そしてこのことを、リカードも事実上理解していた。すなわち右の引用句の例解において、労賃の支払にあってられていた流動資本の一部分が、機械の採用によつて固定資本化し、そのために過剰となつたすべての労働を雇傭しえなくなる、ということがのべられているのである。

この点においていつそう明確なのは、資本蓄積の法則をとりあつかつたつぎの章句である。「資本と人口との増加ごとに、食物は、その生産がいつそう困難となるために、一般的に騰貴するであろう。食物の騰貴の結果は労賃の騰貴であり、労賃の騰貴ごとに、蓄積された資本がまえよりも大きな割合で機械の使用にむかうという傾向がおこるのである。……労賃を騰貴させるのとおなじ原因は機械の価値を騰貴させず、したがつて資本の増加ごとに、そのより大きな部分が機械

にもちいられる。労働にたいする需要は資本の増加とともにひきつづき増加するであろうが、しかしその増加に比例しては増加しない。その比率は必然的に遞減的比率であろう。」(Ibid., p. 395) ここで、労賃の支払にあってられる資本（流動資本）および機械に投じられる資本（固定資本）としてのべられているものは、いうまでもなく実は、それぞれ可変資本および不変資本であり、したがつて、労働需要の相対的減少と機械使用の相対的増大との承認は、まさに、資本の蓄積にともなう資本の有機的構成の高度化の認識であり、したがつてまた、資本制蓄積が必然的に相対的過剰人口または産業予備軍を産出することの承認であつた。⁽¹⁹⁾

(19) このリカードの新見解は、ジョン・バートン (John Barton, *Observations on the Circumstances which influence the Conditions of the Labouring Classes of Society, 1817*) の影響によるものであつたが、それと同時に、当時ラダイト運動の名のもとにおこなわれた労働者の機械にたいする闘争によつて刺戟されたも

のであつた。

しかしわれわれの論点にとつて重要なことは、ここで、蓄積される剰余価値部分がすべて可変資本に、すなわち追加労働力に転形するという、資本蓄積にかんするスミスの、そしてまたリカード自身の謬見が、見事にうちやぶられていることである。ひとたび蓄積される資本の一部が、機械に、すなわち追加不変資本に転形されるということをみとめるならば、生産物の価値のうちにも、消費された生産手段の価値、すなわち不変資本をみとめねばならぬ。すなわち、商品価値は、たんに $c + m$ にのみ分解されるのではなくて、そのうちに c をもふくまねばならぬ。「アダム・スミスのドグマ」は、ここにリカードによつてふみこえられる。これはまさに古典派的再生産 \parallel 蓄積論の劃期的前進である。そしてこの論理をおしすすめてゆけば、スミスのドグマを一支柱とするリカードの恐慌否定論も、やがて止揚されぬならぬことになる。

一個の再生産理論たるリカードの理論体系（資本の蓄積にともなう「労賃・利潤・地代の自然のなりゆき」は、くりかえしのべてきたように、收穫逡減のごとき自然法則をその礎石とするものであつた。利潤率の低下傾向にかんする彼の論証は、まったくこの基礎に立脚するものである。そして彼によるセー法則 \parallel 販路説の援用も、一般的過剰生産 \parallel 恐慌の否定も、ひたすらこの自己の分配理論 \parallel 資本蓄積論を擁護するためのものであつた。しかるに資本の有機的構成の高度化をみとめるならば、利潤率の低下傾向の法則の論証のために、收穫逡減のようなドグマはもはや必要ではない。それはいわば、資本制生産様式を絶対化するところの古典派的な自然主義的経済学体系——リカードの恐慌否定論もその一構成部分である——から、資本主義社会の経済的運動法則を闡明するところの真に科学的な経済学体系への、移行の第一歩であつた。もちろん、リカードには、その後わずか二年の寿命しかのこされていない

かつた。そしてもし彼に、より以上の余生があたえられていたとしても、彼のブルジョア的本能がその理論的前進をはばんだであろう。われわれはただ、このことによつて、科学的経済学の大道が、リカードからマルクスへのそれであることを、リカード体系の内面からも知りうるのみである。